

選評

廣谷妃夏

法隆寺伝来〈赤地獅子鳳凰円文錦〉及び〈赤地格子連珠花文錦〉の制作年代再考

—東部ユーラシア染織品との比較から—

本論文は、従来、7世紀後半から8世紀初頭の制作と考えられてきた法隆寺伝来「蜀江錦」のうち〈赤地獅子鳳凰円文錦〉及び〈赤地格子連珠花文錦〉について、先行研究の再検討、トルファンのアスターナ古墓群ならびにトヨク石窟の出土作例、日本伝世作例との図様、織組織の比較により、6世紀後半から7世紀初頭まで遡る可能性を提示したものである。

まず初めに、先行研究において年代の根拠とされてきたアスターナ古墓の墓誌の再読、同古墓群の埋葬状況等の確認から、7世紀後半の墓誌の年代は類似する錦の副葬の下限に過ぎず、実際の副葬ないし制作年代はそれより数十年遡る可能性があることを看破する。続いて、2作例にみられる獅子文、鳳凰文、格子文等について、トルファン出土作例を中心に同種の文様形式の変遷を想定し、それらとの比較によっていずれも6世紀後半から7世紀初頭に位置づけられることを指摘する。そして、そのうえで織組織についても検討を加え、^{ふくさまひら}複様平組織経錦である2作例は、中国における織組織の変遷に照らすと、7世紀前半頃とみられる複様平組織経錦から^{ふくようあやそしまたにしき}複様綾組織経錦への移行期のなかでも早期に位置づけることができるとし、文様から推定された制作年代の裏付けとしている。以上の論旨はきわめて明快であり、文様の描き起こし図を用いた図表の利用も効果的で、総じて古代染織史研究に大きな一石を投じる内容となっている。なお、文様形式の検討にあたり、獅子文については仏教造像における獅子の表現を参照し、格子文については^{せん}甌の文様に類縁性を認めることによって、それぞれ年代観や文様の展開の考察に新たな視点を導入している点も意欲的である。ただし、錦自体の考察に比べると十分な例証ができていたとは言えず、その点はさらなる研鑽を期待したい。

本論文は最後に、従来は隋唐からの影響が指摘されるにとどまっていた生産・流通事情についても新たな見通しを提示している。南北朝時代から隋唐にかけての錦の制作地の中心を四川地域と見定めたうえ、近年注目されているソグド人による交易や仏教を媒介とする外交関係を踏まえつつ、四川地域における錦生産の動向や朝鮮半島及び日本への伝播の状況を諸史料からたどり、かつ大陸と日本の錦の織組織の変遷が平行な関係にあることを指摘する。やや大味な見通しながら、錦の生産や流通事情から当時のダイナミックな文化交流の実態を解明する手がかりを与えるものとして評価できる。

本論文が明確に主張する法隆寺伝来「蜀江錦」の年代観は、日本古代の染織史研究に大きなインパクトをもたらすばかりか、法隆寺創建期ないしそれ以前に遡るという点において、美術史の枠を超えて法隆寺研究にも大きな刺激を与えるものと言えよう。以上の理由から、廣谷妃夏氏に『美術史』論文賞を贈り、その努力と功績を称える。